

人に対する働きかけの使役態について

翟雯茜*

Classification of Causative State (acting on people)

Wenqian Zhai

Abstract: Causative state is one of the most important contents of Japanese grammar. There are many studies on classification of causative state according to the part of speech or the meaning of sentences. With example sentences extracted from Japanese novels and newspapers, this essay tries to search for a new classification method by using the theory of collocation which is related to causative state, and is mainly about the type of causative state acting on people.

Key words: Causative state, collocation, changes

1. はじめに

日本語の使役態という課題は、日本語文法の重要な内容の一つであり、従来、使役態を中心として異なる角度からの研究はいろいろある。その中では、使役態の分類に関する検討も数多い。しかも、この数多くの分類方法は、だいたい使役動詞の自他性によって行われるものだったり、使役文の表す意味によって分類するものだったり、被使役者の取る助詞の違いによって分類するものだったりである。

連語論の研究は動詞の形態論的な研究と並んで、日本語言語学の新しい分野である。連語というものをきわめて常識的に規定するとすれば、二つあるいは三つの、あるいはせいぜい四つの単語の組み合わせであると規定することができる。実は、連語論と使役態との間には一定の関係が存している。奥田靖雄、渡辺義夫、荒正子などの学者は異なる立場から連語論について研究しているが、ここでは、使役態と関係がある、奥田靖雄の「を格の名詞と動詞とのくみ合わせ」、「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」を選んで説明する。

奥田の「を格名詞と動詞とのくみあわせ」(1983年)によると、動詞が核になっていて、それ

* 教養部

をを格の名詞がかざっている連語は、かざり・かざられのむすびつき方の違いによって、対象的なむすびつきと状況的なむすびつきに大きく分けられる。対象的なむすびつきをあらわす連語では、かざられ動詞は対象にむかっていく、さまざまな動作をさししめしていて、を格の形をとるかざり名詞は、その動作が向けられる直接的な対象、つまり動作の客体をさししめしている。他動詞と組み合わせあって、動作の直接的な対象を表すのは、名詞のを格の形の一般的な、基本的な働きである。

状況的なむすびつきを表す連語では、かざられ動詞は移動動作をさししめす自動詞、あるいは移動動作を形態的に捕らえている自動詞であって、を格の形をとるかざり名詞は、その移動動作が進行する空間をさししめしている。

また、対象的なむすびつきを表すを格の名詞と動詞との組み合わせは、飾られ動詞の語彙的な意味のずれ＝抽象化に呼応しながら、さまざまなむすびつき方、それを内容に表現する、さまざまな構造的なタイプを作り出している。これを一般化するなら、対象への働きを表す連語、対象の所有・やりもらい・うりかいを表す連語、対象への心理的なかわりを表す連語の三つのグループに分類できる。

に格のかたちをとる名詞と動詞との組み合わせは、(1)対象的なむすびつき、(2)規定的なむすびつき、(3)状況的なむすびつきをあらわしている。この場合、対象的な結びつきは土台に横たわっていて、その上に規定的なむすびつきと状況的なむすびつきとが重なっているというかたちで、これらのカテゴリーは相互に関係を持っている。一般的に言えば、規定的なむすびつきと状況的な結びつきとは、対象的なむすびつきから派生したものである。ここで、対象的なむすびつきは、ありかのむすびつき、行く先のむすびつき、くっつきのむすびつき、譲り相手のむすびつき、話し相手のむすびつき、かかわりのむすびつき、働きかけのむすびつき、道具のむすびつきのように分類していた。

筆者は日本語言語学を勉強する過程において、連語論の中で使役態と関係がある点を見つけた。連語論の観点を利用して日本語の使役態を分類するという可能性があると思って、使役態についての新たな分類方法を探し求めようと希望している。本論文は連語論の立場から、連語論の分類方法を利用して、使役態の分類について研究することを目指している。

2. 本論

日本語の連語論の研究は、かざられが名詞である場合と、動詞である場合と、形容詞である場合とに大きく分かれる。それぞれの連語は独自の連語論的なむすびつきの体系をなしているからである。たとえば、名詞と動詞との組み合わせ、名詞と名詞との組み合わせなどである。また、名詞と動詞との組み合わせの中に、を格の名詞＋動詞、に格の名詞＋動詞、へ格の名詞＋動詞、で格の名詞＋動詞、から格の名詞＋動詞、まで格の名詞＋動詞、と格の名詞＋動詞のような種類があるが、ここで使役態と関係があるのは、を格の名詞＋動詞とに格の名詞＋動詞との二つの種類である。

奥田靖雄は「を格名詞と動詞とのくみあわせ」（1983 年）に、対象的なむすびつきをあらわすを格名詞と動詞との組み合わせを、対象への働きかけをあらわす連語、対象の所有・やりもらい・うりかいを表す連語、対象への心理的なかわりを表す連語という三つの種類に分けている。

対象への働きかけをあらわす、を格の名詞と動詞との組み合わせでは、飾り名詞が物や人、現象、状態、過程、関係などを指し示していて、かざられ動詞でしめされる動作がそれになんらかのしかたで働きかけていく。この場合に、働きかけをうける物や人や現象などに、なんらかの変化が引き起こされるのが普通である。

対象に働きかけて、それになんらかの変化を引き起こすことをあらわす連語は、さらに(1)人に対する働きかけ、(2)物に対する働きかけ、(3)事に対する働きかけの三つのグループに分けられる。本文は、「人に対する働きかけ」について詳しく述べる。

人に対する働きかけをあらわす連語では、ある働きかけをうけて、変化する対象は人である。飾りの位置に人を示す名詞しか現れないというのは、この種の連語の特徴である。

また、この種の連語では、「かざられになる動詞は、人間に対するはたらきかけ、その結果おこる生理的な、心理的な状態における変化、社会的な状態（身分や職業など）における変化、空間的な移動をしめしている」。

かざられ動詞はその語彙的な性格によって異なっている。つまり、人間の生理・心理的な、社会的な状態変化をしめしている。これはかざられ動詞の語彙的な意味の特徴である。人への働きかけは、対象を刺激してそれに一定の変化を呼び起こすという動詞の他動・使役性によって実現

されている。

人に対する働きかけをあらわす使役態は、語彙的意味のちがいから、「心理的な状態変化・空間的な位置変化・生理的な状態変化・社会的な状態変化」のような四つのカテゴリーに分類することができる。

2.1 心理的な状態変化

まず、心理的な状態変化をもたらす使役動詞の使役文を見られたい。

- (1) 日本の法律のなかに、愛という字は一字もないよ。もともと男と女との愛というものは、理由のない感情なんだ。謂わば本能的な要求であって、客観的に第三者を納得させることのできるような理由は、何も無い。（青春の蹉跌）
- (2) 今の日本の舞踊界になんの役にも立ちそうでない本であることが、反って彼を安心させると言え言える。（雪国）
- (3) 病人の食事は梶田先生の云うままに、原爆軽症患者の重松と同じもので我慢させることにした。（黒い雨）
- (4) 騒ぎをきいて顔を出した加恵も、青洲も於継も、白煎の屍体の前でしばらく声がなかった。猫の死そのものは見馴れていたから驚かなかった。しかし、低い縁先から落ちて死んだという事実は、何にもまして彼らを慄然させていた。（華岡青洲の妻）
- (5) 登美子の産んだ孫は母を悲しませ、康子の産んだ孫は母を狂喜させる。（青春の蹉跌）
- (6) 須賀の顔や肩つきや胸が女らしく肉付いて見えるだけにその発見は白川を興奮させた。（女坂）
- (7) ほんとに、お前たちはときどきおじさんをびっくりさせる。（新生）

以上の例文において、使役の「～させる」と結びついて使われている動詞「納得する」「安心する」「我慢する」などは「行く」「来る」のような人の意志性を持っている動詞と異なって、人間の心理的な状態変化をあらわす動詞である。このような人間の心理的な状態変化をあらわす動詞は一般的に本人の意志でそのような動作・作用などを行うことができない。

「心理的な状態変化をあらわす連語では、かざられ動詞は人間の心理における変化をしめしている。この種の連語を作る動詞も、多くが人間の心理的な状態を示す自動詞の使役の形なのであ

る。」

この種の使役動詞になる動詞は、多くが人間の心理的な状態をしめす自動詞であるから、その心理的な状態変化の主体は、被使役者になったとき、「を」をとる。「に」とはならない。寺村秀夫（1982）も次のように述べている。

この種の動詞は、失望する・ぎょっとする・感心する・安心するなどであるが、笑う・泣くなども同類である。また、喜ぶのように「～を」も「～に」もとるもの、うらやましがる・こわがる・うれしがるのように、その感情の対象として「～を」という形の補語をとるものも、すべてその主体が被使役者となるときは「Yを」となるのが普通である。

この種に属する動詞は、

（ア）あきる、いらだつ、おこる、かなしむ、こまる、くるう、たのしむ、たかぶる、ひがむ、ひねくれる、まごつく、まどう、よろこぶ

（イ）うれしがる、うらやましがる、いやがる、おもしろがる、さびしがる、はかながる

（ウ）いきいきする、いらいらする、ぎょっとする、せかせかする、どぎまぎする、ぞっとする、はっとする、びっくりする

（エ）心配する、心服する、安心する、退屈する、満足する、混乱する、失望する、納得する、興奮する、反発する、動揺する、憤激する

などである。これらの動詞の特徴からみれば、四つの種類に分けられる。（ア）は「あきる」「たのしむ」といったような日本本来のことば、つまり和語動詞であり、（イ）は「うれしがる」「おもしろがる」のように、形容詞「うれしい」「おもしろい」から派生した動詞であって、（ウ）は「いきいきする」「いらいらする」のような副詞・サ変動詞で、（エ）は「心配」「心服」などのような漢語のサ変動詞である。これらの動詞は感情を表す動詞で、助動詞「～せる」「～させる」と組み合わせる使役態になり、被使役者に心理的变化をもたらす。

このような使役文は意志性動詞の使役文と違って、次のような特徴を持っている。心理的な状態変化をあらわす動詞を使う場合、X（使役者）がY（被使役者）に対するはたらきかけはことばによる命令や指令などは不可能である。いずれの動詞もXが何かをしてあるいはしないで、そ

の影響や結果はYにある心理的な状態変化を起こさせるという意味である。ⁱたとえば、例文「ほんとに、お前たちはときどきおじさんをびっくりさせる。」は、使役者X（お前たち）が被使役者Y（おじさん）に「びっくりしろ」と指示して「びっくりさせる」のではない。むしろ、Xのしたことが原因でYの心理的な状態変化を引き起こした。同様に、「須賀の顔や肩つきや胸が女らしく肉付いて見えるだけにその発見は白川を興奮させた。」もXがY（白川）に興奮しろと指示あるいは命令して「興奮させた」のではない。「白川」を「興奮させた」の原因は「須賀の顔や肩つきや胸が女らしく肉付いて見えるだけにその発見」である。ひとことに言えば、この種類の使役文は使役者であるXがあることをして、そのことが原因になって、被使役者Yの心理的な状態変化を引き起こすのである。したがって、この種類の使役態において、使役者Xが非情物（物やことがらなど）であっても成り立つことができる。たとえば、「しかし、低い縁先から落ちて死んだという事実、何にもまして彼らを慄然させていた。」では、使役者Xになるものは人間ではない、「低い縁先から落ちて死んだという事実」という非情物である。このような非情物が主体である場合、言葉によって働きかけができないというのは当然である。

2.2 空間的な位置変化

つぎは空間的な位置変化をあらわす使役動詞による使役文である。奥田氏の研究（1983）によると、「空間的な位置変化を表す連語では、かざられ動詞は人間の空間的移動をしめして、を格の名詞でしめされる人間がその移動をおこなう。したがって、この種の連語は、場所をしめすに格あるいはへ格の、から格あるいはまで格の名詞で広げられるのがふつうである。」

この種類に属する動詞は、あるく、あゆみよる、いく、おしかける、かえる、かよう、すすむ、しりぞく、たつ、たちのく、のぼる、はしる、ひく、むかう、はいる、はこぶ、移動する、移転する、帰国する、帰宅する、行進する、前進する、後退する、移住する、避難するなど移動を表す動詞である。

- (8) それをまちがいなく何時何分に一緒にプラットフォームを歩かせるような仕事を、どうして男女に強いことができたか。（点と線）

- (9) 昨日の夜の工場長の発表で、工員たちのうち軽傷のものだけ各自の故郷へ避難させるため、今朝五時前から救護事務を開始して、二台のトラックが使用されることになっていた。（黒い雨）
- (10) 舎監に訊ねると、広島市内からの通勤者のうち、重傷の被爆者はともかくも軽傷者には休暇を与えて帰郷させるのだと云った。（黒い雨）
- (11) 僕らは、静かな子供たちだった。ひそひそ囁きあうとか、声を殺して笑うとかしながら、あるいは黙りこんで、僕らは褐色に皮膚の灼けた軀をじっとさせていた。時々、大声で叫んで、看護婦に便器を運ばせるほかは、長く単調な時間を、僕らはじっとして生きている。（死者の奢り）

「以上の例は、かざられ動詞が移動動作をしめす自動詞の使役のかたちである。頻度を別にすれば、この種の連語をつくる動詞も、やはり自動詞の使役のかたちがおおい」。

移動動作を示す自動詞を使うとき、助詞「を」がよく移動の場所を表す。この場合、もし被使役者に「を」をつけると、移動の場所をあらわす「を」と重複することになる。したがって、被使役者に「に」をつけるのが普通である。しかも、「を」と「に」の両方も使うことができる場合もある。たとえば、

- (12)外国船を/にその海峡を通過させる。

また、寺村秀夫もこれについて次のように述べている。

移動の場所をあらわす「を」は、「出どころ」と「通りみち」との場合がある。このうち、出どころの「～を」をとる場合は、それを「～から」にかえれば、X（本研究の被使役者に相当する）は「を」「に」どちらをとっても、重複の問題を起こらないわけであるが、一般に「を」のほうが「に」よりも自然と感じられるようである。たとえば、

虎が檻を/から出る。

*虎を檻を出させる。

虎に檻を出させる。

虎を檻から出させる。

? 虎に檻から出させる。

しかし、出どころの「を」でも、「から」に変えられないものがある。その場合は、重複を避ける原理から言えば「に」のほうがよいはずだが、実際には「に」を不自然、「を」のほうが（少しおかしいが）「に」よりましと感じる人が多いようである。

息子が大学を卒業する。

息子を大学を卒業させる。

？息子を大学から卒業させる。

？息子に大学を卒業させる。

次に「通りみち」の「～を」の場合だが、これは「出どころ」のように「から」に変えるわけにはいかないから、もしX被使役者に「を」をつけると、一文の中に二つの「～を」があつてぎこちない感じになる。しかしそれにもかかわらず、「～に」よりは「～を」のほうがやはりましな感じがある。しかし、このあたりになると判定が微妙であろう。使役の内容はここではより重要かもしれない。

2.3 生理的な状態変化

「ここでいう生理的な状態変化とは、おどる、さわぐ、あばれる、たつ、すわる、なく、わらう、よう、つかれるのような生理的な肉体運動あるいは状態をさしている。この生理的な状態変化を表す連語では、かざり名詞で示される人間が、こうした生理的な運動なり状態の中にひきこまれるのである。」ⁱⁱたとえば、つぎの用例をあげてみる。

(13) 岸本は七日ばかりこの旅の人を自分のもとに逗留させておいた。(新生)

(14) 指定券の切符を工作すれば、座席をならべて、その男女をすわらせることはそんなに困難ではない。(点と線)

(15) 大橋登美子を妊娠させた、その男です。捜して、会わせて下さい。(青春の蹉跌)

(16) おれは、馬や牛じゃないのだから、意志に反して、むりやり働かせるわけにはいかない。(砂の女)

(17) 彼はそこに絵を描きながら、ひとりの少年を遊ばせていた。(齒車)

この種の使役態をつくることができる動詞は、ほとんど自動詞である。たとえば、あそぶ、あばれる、あるく、うなる、おどろく、さわぐ、しぬ、すわる、たつ、だまる、つかれる、とぶ、

なく、ねむる、はらむ、はたらく、やすむ、よう、わかがえる、わらう、休息する、休養する、自殺する、分娩する、逗留する、同居するなどである。

もちろん、この種類の動詞のなかで、いかす、ねかすなどのような動詞もある。これらの動詞はとかす、ながす、わかすと形態論的につくりが同じであるということから、他動詞であるとみなすことができるが、自動詞の使役のかたちとは深い関係がある。実は、「よわす」と「よわせる」、「おどらす」と「おどらせる」、「わらわす」と「わらわせる」とは、語彙的および文法的に同義語として用いられている。わかす、とかす、ながすなどのような動詞が他動詞になっているのは、これらの動詞がものに対する働きかけをあらわして、それとはべつに使役の形が成立するからである。

それにしても、この種の生理的な状態変化をあらわす動詞は自動詞の使役の形であるという一般的な結論を引き出すことができそうである。

生理的な状態変化と心理的な状態変化との、二つのむすびつき方のあいだに境界線をひくことはむずかしい。これらの動詞で表現される現実、機械的にふりわけることのできないものが多いからである。

また、次の例文をみよう。

(18) a 母は息子を働かせた。

b 母は息子に働かせた。

この種類の動詞も前の空間的な位置変化をあらわす動詞と同じように、使役文をつくる場合、被使役者に「を」つけると、強制的な使役を表し、「に」をつけると、許容的な使役をあらわすとされることがある。例文の(18a)は使役者である「母」は被使役者である「息子」の意志にかかわらず「働く」という行為をさせたという意味を持つ。(18b)は被使役者「息子」の意志による行為の場合でなければならない。したがって、もし被使役者は意志性を持っていないものであれば、「を」しか用いられない。たとえば、

(19) 機械の起爆装置を働かせる。

*機械の起爆装置に働かせる。

さらに、「わらう」「なく」「おどろく」などのような一定の感情を含む生理的な状態変化をあら

わす自動詞は使役文をつくる場合、誘発の意味を表現している。この誘発の対象、つまり、被使役者はよく「を」を使って、「に」はあまり用いられない。たとえば、

(20) a 太郎は弟を泣かせた。

b* 太郎は弟に泣かせた。

(21) a 太郎は弟を笑わせた。

b* 太郎は弟に笑わせた。

しかし、たとえば、葬式で泣くことが儀式とされていて「泣く」アルバイトがある場合を想定すれば、(b) も許容されよう。つまり意志による自発的行為として受取られて初めて、「に」を用いられて、許容されるのである。

2.4 社会的な状態変化

最後に、社会的な状態変化をもたらす動詞の使役文を分析したい。「社会的な状態変化を表す連語では、飾り名詞でしめされる人間が、あたらしい人間関係の中にひきこまれる。あるいは、その人の社会的な状態を変化させることが表現されている。」これは使役文にも通用する。

(22) 矢須子さんのお父さんとも相談して、病人の云う通りこのまま（病人を）入院させることにした。（黒い雨）

(23) 彼は昨日の午後、ここから遠くない街を二時間以上も歩きまわって、登美子を入院させる産婦人科病院を物色しておいた。（青春の蹉跌）

これらの例文から見るとわかるが、使役動詞「入院させる」によって「病人」や「登美子」の社会状態を変化させた。すなわち、社会的な状態変化をもたらす使役動詞は、これを受ける人間の職業や身分、社会的な位置などにおける変化をしめしている。

この種に属する動詞は、

あう、あらそう、かつ、たたかう、つとめる、したがう、そむく、まける、めぐる、加入する、結婚する、参加する、入社する、入学する、入院する、入閣する、退職する、退社する、落第する、家出する、敗北する、降参する、出世する、成功する、奉仕する、失敗するなどのような自動詞と

やとう、めあわす、動員する、雇用する、処分する、解放する、免職する、追放する、放免す

る、退校する、勘当する

などのような他動詞がある。

自動詞の場合、被使役者は「を」格をとり、「XがYを～させる」型の使役文になるが、他動詞の場合、被使役者は「に」格をとり、「XがYにZをVー」型の使役文になる。この種に属する他動詞はあまり多くなく、ほとんどは指示・命令などの意味をあらわすものである。

(24) 社長は秘書に車を雇わせる。

(25) 彼は軍隊に奴隷を解放させる。

参考文献

言語学研究会（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』・むぎ書房

奥田靖雄（1983）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論』・むぎ書房

楊凱榮（1989）『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』・くろしお出版

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』・くろしお出版

菊地康人、山田進（1982）『日本語：意味と文法の風景：国広哲弥教授古稀記念論文集』・ひつじ書房

安藤節子（2001）『自動詞・他動詞、使役、受身：ヴォイス：日本語文法演習』・スリーエーネットワーク

森田良行（2002）『日本語文法の発想』・ひつじ書房

（平成 22 年 3 月 31 日受理）